

江戸考証医家の蔵書目録について

木場由衣登

日本鍼灸研究会

古医書研究に大きな足跡を遺した江戸考証学派の研究の土台となったのは、考証的研究方法とともに蔵書の蓄積である。今回は、彼らの残した蔵書目録を対象に、その構成や内容を概観することにより、当時の研究水準をうかがう一助とする。

今回比較検証した目録は、伊沢氏の蔵書を収録する『酌源堂医書目録』、小島氏の『宝素堂蔵書目録』、そして多紀氏所録の蔵書目録である『聿修堂蔵書目』及び『聿修堂蔵書目録』である。

『酌源堂医書目録』（早稲田大学図書館：ヤ9-904、杏雨書屋：杏3653）は『酌源堂皇朝医書目録』と『酌源堂漢土医書目録』の二冊から構成され、前者は日本由来の医方書や注解書を、後者は中国伝来の医薬書等を収録する。『酌源堂皇朝医書目録』の記載書目数は196（本草36、経解13、脈法3、明堂経脈13、衆病34、眼目口歯4、外科6、婦人5、小児2、痘疹2、養生9、禽獸1、史伝6、雑説48）、『酌源堂漢土医書目録』は355（本草22、経解25、脈法10、明堂経脈16、衆病130〔朝鮮の医書2を含む〕、眼目口歯3、外科10、婦人9、小児19、痘疹8、養生3、禽獸6、雑説27、史伝7、叢書7）あり、これらの総計は551書目であった。

『宝素堂蔵書目録』（国会図書館：191-747、杏雨書屋：杏811・杏1568・乾594）は、聿修堂や酌源堂の目録と比較すると、構成に特色がある。医経（黄帝内经20、八十一難経18、蔵象脈考39、明堂孔穴21）、経方（張仲景方23、傷寒諸方23、魏晉梁隋13、李唐諸家15、趙宋諸家59、金元諸家46、朱明諸家48、清代諸家14、婦人産乳19、少小嬰兒22、痘疹諸方25、瘡瘍諸方16、眼目口歯14）、本草（神農本草5、諸家本草18、諸家食経2）、雑方（論説15、養生15、運氣3）、附録（叢書類5）、外編（記伝8、書目6）の計527書目である。

「聿修堂」を冠する蔵書目録には『聿修堂書目』、『聿修堂蔵書』、『聿修堂蔵書目』、『聿修堂蔵書目録』などがある。これらは図書目録における記載も雑然としているが、凡そ二つの系統に分けられる。一つは多紀元胤を著者と明記し、分類が「経解」から始まる『聿修堂蔵書目』（早稲田大学図書館：ヤ9-910〔表紙は『聿修堂蔵書』〕、国会図書館：191-743〔題箋は『聿修堂書目』〕、京大富士川文庫：イ-176、杏雨書屋：杏1269）、もう一つは、著者が明記されず、分類が「本草」から始まる『聿修堂蔵書目録』（国会図書館：特1-1808、杏雨書屋：乾587・杏311）である。

「経解」が始めに置かれている『聿修堂蔵書目』は、国会図書館本（191-743）では1169（経解46〔内経類30・難経類16〕・傷寒類34、傷寒証治方論70、附録外感11、本草106〔丹薬類2を含む〕、食治12、農書4、診法65、雑病421、婦人科43、幼科雑病59、幼科痘疹80、瘍科46、眼目口歯科20、明堂経脈86、運氣8、養生23、史伝7、書目1、小学1、叢書26）、早稲田大学本（ヤ9-910）では1193（経解47〔内経31、難経類16〕、傷寒論類52、金匱要略類12、字書1、本草84、丹薬2、食治12、農書4、脈法62、太素脈書5、明堂経脈44、内景10、傷寒67、傷暑2、衆病434、眼目口歯19、外科49、婦人49、小児59、痘疹81、雑説34、史伝6、書目1、養生22、運氣9、叢書26）の書目が記載され、早稲田大学本の方がやや分類項と蔵書数が多い。

一方、「本草」から始まる『聿修堂蔵書目録』は国会図書館本（特1-1808）によると書目数が847とかなり少ない。「経解」が冒頭の『聿修堂蔵書目』の方が後に完成した目録である可能性が高いと見られる。